

主 題：キリストにあって歩み続ける

聖書箇所：コロサイ人への手紙 2章6－7節

テーマ：主キリスト・イエスを受け入れた者として歩み続けていますか？

今回も続けて学んでいきたいのは、コロサイ人2：6－7のみことばです。きょうは、キリストにあって歩み続けることに関して、いっしょに考えてみたいと思います。内容に入る前に、まずはみことばをお読みします。

コロサイ2：6－7

「6 あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。7 キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおりの信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。」

さて、ここまでの流れを少し思い返してみてください。特に前回と前々回、私たちはパウロの示したコロサイの教会に対する心遣いを考えました。パウロが愛する兄弟姉妹のことをいかに思っていたのか、どれほど犠牲を払って彼らのために苦闘し続けていたのか、そのすばらしい模範を見たのです。間違いなくパウロは教会のことを愛していました。前回の最後に見た5節を見ても、彼は「私は、肉体においては離れていても、霊においてはあなたがたといっしょにいて、あなたがたの秩序とキリストに対する堅い信仰とを見て喜んでいました。」と言っていました。確かに書かれていたように、パウロは肉体的には彼らから遠く離れてはいました。まさにその時、彼はローマの獄中であつたのです。しかし、それでもなお、彼らの歩みを気にかけていた彼は、にせ教師の脅威がある中で、コロサイの教会の兄弟姉妹たちが堅く信仰に立とうとしている様子を耳にして大いに喜んでいました。彼らの信仰がどんなときも変わらずに、揺るがないものであろうとすること、そうやって歩んでいることに彼は感謝をささげていたのです。

○キリストにあって歩み続けること：

そして、そんなすばらしい歩みをすでになしていたコロサイの兄弟姉妹たちのことを覚えて、大いに喜びにあふれていたパウロは、続く6節で「あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。」と言うのです。パウロは、彼らがそのすばらしい歩みをやめないように、キリストにあって歩み続け、続けて成長していきなさいと求めていたのです。キリストにあって歩み続けて行くということが、コロサイの信仰者たちにとって欠かせないものでした。そしてこれは今の私たちにとっても、欠かせないものになります。私たちもキリストにあって歩み続けて行くことが求められるのです。果たして私たちの歩みはどうでしょう？私たちは今、キリストにあって歩み続けていると言えるのでしょうか？それぞれの信仰は、キリストにあって日々成長し続けているのでしょうか？パウロは、この「歩む」ということばをよく使いますが、パウロが言っている「キリストにあって歩み続ける」というのは、そもそも具体的に何を意味しているのでしょうか？きょうはそのことに関して、改めていっしょに考えたいと思います。パウロはこのキリストにあって歩むということがどういうことなのかを、非常に簡潔に大きく二つの点に分けて教えてくれました。6節と7節に、キリストにあって歩み続けて行くことにおける「前提」と「内容」を教えてくれています。では、それがどういうものなのかをよく考えてみましょう。

1. 前提：主キリスト・イエスを受け入れていること 6節

まず初めに、6節に前提について記されていました。キリストにあって歩み続けて行く上で、いったい何が前提になるのか、パウロはこう述べるのです。6節「あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。」と、はっきりと記されていました。キリストにあって

歩む上での前提は、まず主キリスト・イエスを受け入れていることでした。それが最初の出発点だったのです。もしある人が主を受け入れたのであれば、その者は彼にあって歩み続けて行くことが求められていました。「受け入れた」ということばが使われていましたが、このことばは非常に興味深いもので、実を言うと、「ただ何かを受け入れる」ということ以上の意味を持っています。このことばにはもともと「口頭などで伝えられてきた教えや伝統を心から受け入れる」といった意味が含まれています。つまりだれかによって一日、二日で作られたような教えや考えを信じるのではありません。人々によって継承されてきた権威のある教えや真理を受け取って、それを心で信じることを表しているのです。コロサイの教会に起こっていたことはまさにそうでした。彼らは最初、福音の真理をいったいだれから聞いたでしょう？彼らはエパfrasから真理を耳にしたと、1章に書いてありました。でもその真理というのは、別にエパfrasが勝手に考えたものではありませんでした。エパfras自身もその真理をパウロから聞いて信じたのです。ですからコロサイの教会に届いてきたその教えは、いろいろな人々によってずっと宣べ伝えられ続けてきた、初めから変わらない真理でした。彼らはそういった教えを自分自身のこととして受け入れて信じていたのです。パウロは彼らにそのことを思い出させていたのです。背景を思い出しても、教会の中にせ教師たちが間違った新たな教えをもたらしてきて、混乱を起こしていたのです。だから、改めて兄弟姉妹たちに言うのです。あなたがたは確かにずっと宣べ伝えられてきた変わらない真理を、キリストをもうすでに心から受け入れたのだから、そのキリストにあって歩み続けていきなさいと。

そしてパウロは、同時にここで彼らが受け入れていた福音の真理をより詳しく教えてくれていました。もう一度6節をよく見てみると、「キリスト」とは言わずに、「このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから」と言っていました。「主キリスト・イエス」と、三つのタイトルがここに用いられていました。もともとのギリシャ語に忠実にこの部分を訳すと、「キリスト」、「イエス」、そして「主」という順番で並んでいました。コロサイの信仰者たちは、そんなお方を受け入れていたと言うのです。先に行く前に覚えておいてほしいことは、彼らはただキリストを受け入れていたのではないということです。ただ、イエスを信じていたのでもなければ、ただ主と認めていたのでもありません。彼らは伝えられてきた「キリスト」、「イエス」、「主」をすべて信じ受け入れていました。自分たちが好きなものだけを取っていたのではなかったということです。

そしてこれら三つのタイトルには、もちろんそれぞれ重要な意味がありました。

▷キリスト

「キリスト」とはどういうことでしょうか？キリストというのは「油注がれたもの」ということでした。人々がずっと待ち望み続けていたメシヤ、救世主、救い主を表していたのです。この方こそ旧約の時代、言われ続けてきたすべての約束を果たすために来られたお方、そのキリストを彼らは受け入れていたのです。

▷イエス

「イエス」というのは、彼の両親であったヨセフとマリヤによってつけられた名前でもありました。それに加えて、この名前には「主は救い」という意味も含まれていました。この方こそ、人となって来られたご自分の民を罪から救い出してくださるお方。この方以外にはだれによっても救いはない、そんなイエスを彼らは信じていたのです。

▷主

そして最後に「主」とありました。キリスト・イエスは紛れもない主だということです。少し覚えていてほしいのは、パウロは最初に出ていたキリストもイエスも、もちろん重要なものとして扱っていますが、あえてここで主を最後に持ってきて、キリスト・イエスが主なのだということを強調するのです。

キリスト・イエスは主です、この方こそ今も昔もすべてをご自分の意のままに支配されている、すべてにまさっておられる主の主、王の王なのだと言うのです。

それこそパウロがこのコロサイの中で、1章からずっと語ってきたことでもありました。彼は、御子についてひたすらに語り続けていたのです。キリストは「見えない神のかたち」(1:15)でした。「造られたすべてのものより先に」おられたお方でした。このお方はすべての世界のもの、「天にあるもの、地にあるもの……王座も主権も」造った創造主であり、またご自身のからだである教会のかしらでもあるお方でした。また、この方は創造主やかしらであるだけではなくて、神様との間に和解をもたらしてくれた贖い主でもありました。罪によって壊されていたその関係を、この御子の十字架の死が修復して下さったのです。そしてこんな偉大な方の中には、すべての知恵と知識との宝までもが存在していました。そんなすべてにまさる第一のお方、それこそ彼らが信じ受け入れていた主だったのです。

コロサイの兄弟姉妹たちにとって、まさにキリスト・イエスこそ唯一の主でした。この「キリスト・イエスは主です」という表現は、1世紀を生きているクリスチャンたちにとってはとてもなじみのある告白でもありました。なぜかという、ローマ帝国のその時代、その支配下にあった者たちは、常にあることを問われ続けていたのです。それは、「キリスト・イエスは主です」ではなくて、「カイザルが主です」ということでした。この当時、人々は何よりもローマ皇帝を崇拝して、その支配に従っていくことが求められ続けていたのです。「カイザルは主です」と言わないような者たちは殺されていきました。そのような迫害がある中で、信仰者は戦い続けたのです。彼らは自分たちの主は、決してカイザルではなくて、キリスト・イエスなのだと告白し続けていました。そしてそんな告白は、人々の救いにとっても欠かせないものだったのです。だからパウロも人々にそんな主を大胆に語り続けていました。Ⅱコリント4:5を見ると、「私たちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝えます。私たち自身は、イエスのために、あなたがたに仕えるしもべなのです。」と書いています。彼はずっとそうやって宣べ伝え続けていたのです。そしてその福音の真理は、もちろんコロサイの教会へと届きました。だからこそ彼らもキリスト・イエスを主として信じ受け入れていました。そしてその信仰によって、彼らは救われていたのです。

今の私たちにとっても同じです。いや、むしろ「キリストは主です」と認めること以外に、救いする方法はありませんでした。ローマ10:9に「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせて下さったと信じるなら、あなたは救われるからです。」と、聖書ははっきりと教えています。イエス様を自分の主人として認めて、この方の権威にすべてをゆだねて従うということは、あってもなくても良いことではありませんでした。救いには絶対になくはならないものだったのです。ある人は、イエス様が自分自身の罪のために死んで下さった、罪の赦しを与えて下さった、それはすばらしいですね、そんなあわれみ深いイエス様を私は喜んで受け入れますと言うかもしれません。でも自分自身の主としては受け入れたくありません、イエス様のために、神様のために自分の人生のすべてをささげるという選択はしたくはありません。確かに自分自身は永遠にはさばかれたくはありません、天国にも行きたいです。だから私は救い主としてイエス様のことは信じます。でも自分の主人としては認めたくありません、自分のすべてを犠牲にして、この方に仕えていくことはしたくありませんと。もしそう言うのであれば、みことばがはっきりと教えていることは、救いとはそんなものではないということです。イエス様を信じるときに、自分にとって都合の良い部分だけを切り取って信じることはできないということです。自分が納得する部分だけを、自分が同意できる部分だけを信じて、それ以外は信じないということは絶対にできないということです。救われるためには、私たちはイエスを主と告白しなければならない。言い換えれば、イエス様の前にへりくだって、自分の人生のすべてにおいて、イエス様こそが私にとっての主人なのだと、この方が私にとっての人生のすべての権威を持っておられるお方なのだと心から認めることが求められるということです。

コロサイの兄弟姉妹たちは、その決心をしていました。彼らは主キリスト・イエスのことを心から受け入れていました。キリストを自分の主としてすべてのものをささげ、すべてのものを犠牲にして仕えると、彼らは認めていたのです。そして彼らがそのようにして主を受け入れていたからこそ、パウロは、彼らが告白して終わりではなくて、その主にあって歩み続けていくことを命じていました。主を告白して信じる彼らが、どんなときもその告白に基づいて、どんなときもその主にすべてをゆだねて自分自身ではなく主に従っていくことを求めていました。つまり、私たちがこの6節を見るときに、キリスト・イエスを主と告白する信仰と、彼にあって歩みなさいという主に従っていくという生き方は、切っても切り離せない関係にあるということです。私たちは口ではいろいろなことが言えます。問われるのは、私たちの行いが、私たちの生き方が変えられ続けているのかということです。

果たして私たちは、まずそもそもキリスト・イエスを主として信じ受け入れているのでしょうか？イエス様的一部分だけを切り取って受け入れて、それ以外は受け入れていないということはないのでしょうか？そして主として、自分の救い主として信じて受け入れていると言うのであれば、果たしてそれにふさわしい者として、実際に歩み続けているのでしょうか？一つ間違いなく言えることがあります。それは、もし私たちがイエス・キリストを自分の主としていないのであれば、自分自身のすべてをこの主の支配にゆだねて歩んでいないのであれば、その人は自分自身をクリスチャンと呼ぶことはできないということです。まだあなたはキリストの弟子ではないということです。イエス様がはっきりとこう言われていました。マタイ7：21に「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」と。ルカ6：46にも「なぜ、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。」と、イエス様は人々に疑問を呈しておられました。あなた方はわたしのことを「主よ」と呼んでいるかもしれませんが、でも、それならどうしてわたしの言うことを行っていないのですか、どうしてわたしのことばに聞き従っていないのですかと。言い換えれば、イエス様を救い主として、主として信じるということは、それに伴った生き方をしていくことも求められるということです。それらは切り離せないものだということです。主と告白して、心から受け入れるのであれば、その告白にふさわしく主にあって歩み続けて行くことが、私たちには求められていたのです。

では、私や皆さんがする告白は、皆さんの歩みに結びついているのでしょうか？キリストを本当に自分の主人として歩んでいるのでしょうか？先ほども言いましたが、私たちはことばでは幾らでも言えます。問題は心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして何よりも主を愛しているのでしょうか？それとも今も変わらずに自分自身のことを何よりも愛し続けているのでしょうか？考えてみてください。生まれながらの私たちは、みんな自分を愛していました。自分の望みをかなえることを一番として歩む者でした。自分の思いのままになることを、自分が計画したとおりになることを願って、もしそれを邪魔するような者がいるのであれば、それに腹を立てていたのです。思いどおりになることを邪魔されたときに、私たちは不満を覚え続けていました。それは自分たちが自分自身を何よりも愛していることの証拠でした。その歩みは、すべて自分が中心だったのです。そのように歩んでいたからこそ、ほかのだれか、ましてや神様にこれをしろとか、あれをしろとか、そんなことは言われたくもありませんでした。自分自身のすべてをだれかにゆだねたいなどと思いませんでした。そうやって私たちは自分自身を中心にして、神様に逆らって生き続けていたのです。

そんな私たち罪人にふさわしかったのは、ただ神様の正しいさばきでしかありませんでした。でもそんな者がイエス・キリストを本当に知ったときに、すべて変えられたのです。私たちのような罪人のために、ご自身のいのちを捨ててくださって、十字架にかかり、その罪の贖いを成し遂げてくださったイエス様を信じ受け入れたときに、自分のために生きる人生は終わりを告げました。今までは私の計画があって、私の考えがあって、そのように生きていた者たちが、神様のご計画のために生きる者へと変

えられました。今までは自分を喜ばせるためにすべてをなしていた私たちが、神様を喜ばせるためにすべてをなす者へと変えられました。何よりも自分のことを愛していた私たちが、何よりも神様を愛する者へと変えられました。これまで神様のことを頑なに拒み続けて、自分勝手な歩みをしていた者たちが、自分の主人としてすべてを主にゆだねて、この方を主として従って生きていく者へと変えられたのです。あなたは果たしてそのような者へと変えられているのでしょうか？イエス・キリストを、自分を罪から救い出してくださった唯一の救い主だと信じ、そんな方を自分の主として心から受け入れて歩んでいるのでしょうか？問われるのは、どれだけ私たちが聖書の知識を持っているかではありません。どれだけ教会に通い続けているのかもありません。どれだけ福音の内容を正確に伝えることができるのかもありません。あなたが本当に自分自身のすべてを明け渡して、イエス様を救い主として、イエス様を主人として受け入れているかどうかです。もし受け入れていないのであれば、あなたの永遠が問題を抱えています。

でも、みことばはイエス様を本当に自分の主と告白する者には救いがあると、はっきりと教えていました。ローマ書にもそう書いていました。それが、神様が私たちに与えてくれていた約束でした。手遅れではないのです。だからもしまだ自分自身が自分の歩みの主であるのであれば、自分の人生の主として生きていけるのであれば、どうかこれまでのその罪を悔い改めて、主を自分の救い主として、主人として信じ受け入れてください。主イエス・キリストのうちにのみ、私たちに必要な救いがあります。私やあなたのような罪人のために、あの十字架にかかってくださったあわれみ深い方を信じ受け入れて、きょうからこの方のために生きてください。この方のうちに本当の希望があります。そのすばらしい希望を自分のものとしてください。また、もうすでにこの方を自分の救い主、主人として受け入れている兄弟姉妹の皆さん、パウロはコロサイの兄弟姉妹たちに対して、主キリスト・イエスを受け入れたのですから彼にあって歩みなさいと求めていました。今の私たちも同じです。私たちがキリストを主として、心から受け入れたのであれば、この主を愛し、その方に従い続けていくことです。自分のすべてをささげて、この方のために歩み続けて行くことです。主イエス・キリストを受け入れているということ、まずそれがキリストにあって歩み続けることの前提となるものでした。

2. 内容：四つの特徴 7節

続けてパウロは、その内容の四つの特徴を教えてくださいました。キリストにあって歩み続けるということが、いったい具体的にどういうことなのか、7節で四つの動詞を用いて示して教えてくださいました。

1) 根ざすこと 7 a節

7節に「キリストの中に根ざし」ということばが出てきました。まず一つ目の特徴は、根ざすことでした。ここで根ざすと訳されていることばには、「しっかりと根を張る」とか「固定する」といった意味が含まれています。どんな木でも強い雨風にさらされてしまえば、枝は折れて葉っぱは吹き飛んでしまうかもしれません。でも、根がしっかりと張っていれば、その木自体は揺り動かされることはないのです。それと同じように、まるで土に植えた木がそこに根を張って動かなくなるように、パウロはキリストを受け入れた者たちがキリストのうちにあって、ますます強く根ざしていくことを求めていたということです。木を考えてみたときに、そうやって木が根を張っていけば張っていくほど、堅くなっていくのですけれども、同時に、木はますます多くの水や栄養を地面から吸収して成長していくこともできるのです。同じように、キリストを受け入れた者たちもキリストのうちにあって、成長に必要なすべてのものを手にして、どんどんと大きくなっていくことができるということです。イエス様も似たようなことを述べていました。ヨハネ15：5に「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」と書いてありました。かつて私たちはキリストのうちにありませんでした。でも今ただ恵みによって、キリストのうちに入れられた私たちは、成長に必要ないのちも、

力も、恵みも、知恵も、すべてのものをこの方のうちに見出すことができると言うのです。だからイエス様も私を離れないようにとどまっていなさい、離れては何もすることができませんと言われていました。キリストにあって歩み続ける者は、主に根ざすことが求められていました。

2) 建てられること 7b節

また二つ目、7節の続きに「キリストの中に根ざし、また建てられ」と書いてありました。二つ目に挙げられていた特徴は、建てられることでした。ここで「建てられる」と訳されていることばは、文字どおり、「何かを建て上げる」とか「築き上げる」といった意味が含まれていました。パウロは植物の例えから今度は建物、建築の例えへと、ここで話を変えています。彼はキリストを受け入れて、キリストのうちに根ざした者たちはそのままの状態でのではなくて、少しずつ築き上げられていくことを求めているのです。想像してみてください。私たちが家を建てましようとなったときに、私たちはまず土台を築くのです。家を建て上げるためにしっかりとした土台を築くことは、一番大切と言っても過言ではないのです。土台が簡単に揺らいでしまうようなものであれば、その家はすぐに崩壊してしまいます。でも、もし土台をしっかりと据えて満足して、その後何もしなかったなら、当たり前ですけれども、家が決して建つことはありません。土台を据えれば、今度は一つ一つブロックを丁寧に積み上げていくことが求められるようになるのです。小さな建物でも時間がかかりますが、大きな建物であればあるほど、当然時間はさらにかかります。でも時間がかかるからと言って、家を作っている途中で投げ出したらだめなのです。時間がかかっても毎日毎日少しずつ完成を目指して築き上げていこうとするのです。信仰者の歩みもこれと同じだということです。すべてのものはキリストという土台にあって、ますますキリストに似た者となるというゴールを目指して、日々建物を建て上げ続けていこうとするのです。少しでもその目標に近づこうとして歩んで行こうとするのです。

パウロは、ここで使われていた「建てられる」ということばを別の箇所でも用いていました。Iコリント3：9-11に「:9 私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。:10 与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。:11 というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。」と記されています。土台はもうすでに据えられていました。その土台はイエス・キリストでした。それを据えかえることは絶対にできません。問題は、信仰者がその土台の上に忠実に建物を建て上げ続けていくかどうかです。そして私たちが建て上げ続けていこうとするときに必要になるのは、私たちの知恵や賢さではありません。私たちはみことばのうちに、みこころを知って、聖霊の助けと働きに祈り求めながら少しずつ建て上げ続けていくのです。かつてパウロは、エペソの長老たちのためにこんなふうに祈っていました。使徒20：32に「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。」とあります。神様のみことばは人々を育成する力がありました。神様のことばは、私たちの成長になくてはならないものでした。だから私たちは日々みことばを学ぼうとするのです。私たちが成長していこうとして歩んで行くのに必要なブロックがなければ、家を建てることもできません。私たちはみことばの中に、その知恵を見て、私たちは神様を知って、キリストを知って、そしてキリストに似た者へと、神様を喜ばせる者へと変えられていこうとするのです。みことばに記されていることに喜んで従って歩んで行こうとするのです。

同時に、一つ大切なことを覚えておいてください。それはパウロがこの7節で使っていた二つの動詞、「根ざし」と「建てられ」というどちらのことばにも、受け身が使われているということです。受け身が出てきたら、それはとても大切なのでよく考えてください。受け身で書かれているというのは、もともと信仰者がキリストのうちに根ざすようになったのも、キリストのうちにあって建てられるのも、結

局のところ神様のみわざだということです。私たちが何かをしたのではなく、まずほかのだれでもない神様がうちに働いてくださったからこそ、信仰者はキリストの中に堅く根ざし、建てられることが可能になりました。信仰者のうちに最初に働きをなしてくださったのも、その後ずっと働き続けてくださるのもほかのだれでもない神様だということです。だからこれはすごく大きな慰めです。私たちは確かに救われた後も、罪との戦いを、葛藤を何度も何度も経験します。敗北してしまうこともあります。でも、そんな弱い私たちを最初に救い出してくださったお方、キリストの支配のうちに入れてくださったそのお方が変わらずに働いてくださって、私たちのことを支え続けてくださるというのです。もし最初の時点が私たちの努力によるのであれば、私たちが頑張っただけの状態をキープしなければいけなかったでしょう。でも最初は、私たちではありませんでした。途中もすべて神様が働いてくださるのです。

ピリピ 1 : 6 に「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」と書いてあります。パウロも信じていたのです。彼のうちに最初に働きを始めたのは彼自身ではありませんでした。彼のうちに働いたお方も同じ神様だったのです。そして、その方がキリスト・イエスの日が来るまで、それを完成させてくださるということ、彼も堅く信じて歩み続けていました。だから、彼は常に神様に頼り続けていたのです。自分には神様の恵みが十分だと言って歩み続けていたのです。しかし、神様の恵みがあるから、私は何もいませんという歩みはしていませんでした。彼は必死になって神様の前に忠実に歩み続けていこうとしたのです。神様の働きがあると知っている者は、その神様の働きに頼りながら生きて行こうとします。それができるのが、私たちにとっての慰めなのです。だから神様のために働いていこうとするときに、私たちがなすべきことは、その働きのうちに働いてくださる神様の力と助けに私たちが拠り頼むことです。そして私たちがそうやって神様の助けを祈り求めながら、みことばに知恵を見出しながら、与えられた責任を果たしていくことです。それを通して、成長し続けていくことです。キリストにあって歩み続ける者は、主の中にあって根ざし、建てられ続けていくことが求められていました。

3) 教えられたとおりに信仰を堅くすること 7C節

7節の続きに「また、教えられたとおりに信仰を堅くし」とあります。三つ目に挙げられていた特徴は、教えられたとおりに信仰を堅くすることでした。ここで「堅く」と訳されていることばには、「確立する」とか「強められる」という意味が含まれています。パウロが言わんとしていたことは明白でした。キリストを受け入れた者たちは、キリストに根ざして、キリストのみことばによって建てられていくのです。そうやって根ざして建てられていったら、その結果、その人の信仰は間違いなく揺るがないものとして、ますます強められていくのです。最初、私たちがイエス・キリストを信じたとき、その信仰はいろいろなものによって揺らいでしまうことがありました。周りでいろいろなことが起こったときに、不安や恐れを抱いて、信仰ががたがたになることもありました。でもそのような信仰が根ざし、建てられていくことを通して、堅くなっていくということです。もちろん、いろいろなものがその身に降りかかってくるでしょう。罪の誘惑は日々ありますし、試練も起きるかもしれません。心を騒がせるような困難や、心を惑わすような教えや考えに直面するかもしれません。でも、たとえどんなことがあったとしても、キリストに深く根ざして、みことばに立ち続けている信仰は、次第に簡単には揺り動かされなくなっていくのです。鍵は、一度でそれがすべて堅く確立されるわけではないということです。その過程において、失敗してしまうことはあります。揺らいでしまうこともあるのです。でも、キリストにあって、信仰が成熟していけばいくほど、みことばに従って歩み続けて行けば行くほど、その人物は容易にいろいろなものにだまされたり、流されたりしなくなっていくということです。

エペソの教会に対して、パウロはこんなふうには語っていました。エペソ 4 : 13-14 に「:13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。:14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を

欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、」と書いています。この箇所は先週も見ました。パウロは教会が霊的な子どものままでいるのではなくて、成長していくことを求めています。完全に大人になってキリストに似た者へと変えられていくことを求めているのです。なぜ子どものままでいてはいけないのかと言うと、それは子どもがいろいろな間違っただけの教えの風に遭ったり、そういったものにだまされたり、吹き回されたり、波にもてあそばれて不安定になってしまうことが容易な存在だからでした。安定していないこと、すぐに惑わされてしまうという状態は、子どもの特性でした。だから神様に仕える信仰者は、キリストのことばを知って、知識として蓄えるのではなくて、それを生きていこうとするのです。そしてそうやってみことばを生きて行くときに、神様を知り、簡単には揺るがされない、堅く信仰を保つ者へと変えられていくのです。そのようにして成長していくことは、私たちにとって欠かせないものでした。キリストにあって歩み続ける者は、キリストにあって、根ざして、建てられて、そして教えられたとおりに、信仰を堅くすることが求められていたのです。

4) あふれるばかり感謝すること 7 d 節

そして最後四つ目の特徴は「あふれるばかり感謝しなさい」と続いていました。パウロはキリストを受け入れた者たちが、キリストに根ざして、建てられて、信仰を強くしていけば、その者は自然と感謝する者になっていくと言います。しかもここはただの感謝ではなく、「あふれるばかり」の、抑えることもできないような感謝をささげる者となるということです。これは私たちにとって大きなチャレンジです。今まで見てきたことをよく考えてみると、まさにそのように私たちは変えられていくのです。ある人がキリストのことを愛していて、そのキリストに従って歩んでいけば、その人はますますキリストを知る者へと変えられていくのです。キリストのことをさらに知っていけば、その人はキリストに対する信仰を、信頼をますます増し加え、強められていきます。それを通して、キリストへの愛も増し加わっていくのです。キリストに対する愛が増し加わっていけば、その人はさらにキリストに従って歩もうとし、そしてキリストに従って歩み続けていけば、その人はますますキリストを知る者へと変えられていくのです。こうして知って、信仰を強められて、愛を深めるというサイクルを繰り返せば繰り返すほど、その人はキリストを知るようになるのです。キリストがいかに素晴らしいお方なのかを、自分のこととして知るようになるのです。そうすれば当然、主に対する感謝はあふれるようにわき出てくると。

それに加えて、私たちは自分たちに与えられた恵みによる救いを覚えて感謝することができます。ヘブルの著者もこう口にしていました。ヘブル12：28-29に「:28 こういうわけで、私たちは揺り動かされない御国を受けているのですから、感謝しようではありませんか。こうして私たちは、慎みと恐れとをもって、神に喜ばれるように奉仕をすることができるのです。:29 私たちの神は焼き尽くす火です。」と。本来であれば、罪人である私たちがみな向き合わなくてはいけないのは、「焼き尽くす火」である神様でした。あわれみのいっさいない神様の前に立つはずでした。それが当然値したのです。でも、主はそんな私たちをあわれんで、救い出してくださったのです。だからどんな状況が周りにあったとしても、私たち信仰者はただキリストにあって、いつも感謝することのできる理由を、いつも喜ぶことのできる理由をもう持っています。私たちにとって十分過ぎるその偉大なお方をもう知っているのです。だとすれば、私たちはあふれんばかりの感謝をささげる者として変えられ続けて生きているのでしょうか？それとも不平不満を常に口にしている者として生きているのでしょうか？

パウロはこう口にしていました。Iテサロニケ5：18に「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」と。私の愛する主が私たちに望んでおられることは、私たちがすべてのことについて感謝することでした。もちろん私たちにとって喜ぶのが困難に思えるような場面は多々あります。小さな問題から大きな試練に至るまで、私たちの心を悲しませて感謝を奪うような場面に、私たちはみな出くわします。でも、そんなときにこそ一度立ち止まって思い出すことです。キリストは私たちを救うために来られて、私たちが本来受けるべき罰を十字架で

受けて死なれ、そしてその死と復活のみわざを通して、私たちが義としてくださったのです。この世の
だれも決して与えることができないものを、主は私たちに、ただその愛のゆえに与えてくださいました。
そしてそんなキリストによって救われた者たちは、今キリストのうちにあって生かされていて、キリス
トのうちにあって強められ、キリストのうちにあって歩みに必要なすべてのものを見出すことができ
るというのです。だとすれば、私たちはキリストにあって、いつも喜ぶことができます。もし私たちが感
謝できないことに直面するのであれば、私たちは今、いったいどんなお方のうちに入れられたのかを思
い出しましょう。どんなお方が私とともに歩んでくださっているのかです。キリストを信じ受け入れた
者は、ほかのだれでもないこの主にあって、どんなときも感謝することができます。キリストにあって
歩み続けていく者は、あふれるばかりの感謝をささげるといふこと、それが求められていました。

さて、これら四つの特徴がキリストにあって歩み続けるとはどういうことなのか、その内容でした。
キリストに根ざして、キリストに建てられ、信仰を堅くし、あふれんばかり感謝する者として、キリス
トを受け入れた者たちは続けて歩んでいこうとするのです。だとすれば、果たして私たちはキリストに
あって歩み続けているのでしょうか？何よりもキリストを愛して、すべてをささげて従って歩み続け
ているのでしょうか？もしそうではないと言うのであれば、神様の最初の愛から離れていると言うのであ
れば、神様に対するその思いが熱くも冷たくもなく、生ぬるいものになっているのだとすれば、神様の
前に出て、その自分の罪を言い表すことです。悔い改めることです。でもみことばは自分の罪を正直
に言い表して、赦しを求めるのであれば、神様はそれを与えてくださると約束していました。その約
束を信じて、それをなすことです。そしてその赦しを手にして、キリストにあって主の栄光を現すた
めに歩み続けていくことです。忘れてはいけません。私たちが罪を選択することは、私たちに満
足をもたらすことは決してありません。私たちが喜びの源である主に従うという選択をなすとき
に、この方に従って歩んでいくときに、私たちはこの方にあって幸いがあります。主にすべて
をゆだねて歩んでいくときに、この方が私たちの心にこの世は決して与えることのできない、
最高の喜びを与えてくださることができます。だとすれば、どんなときもキリストにあって歩
み続けていくことです。このキリストのうちに、すべてにまさる主の主、王の王のうちに、私
たちの必要はすべてあります。その方を見上げることです。このキリストに拠り頼みながら、
ますます主に喜ばれる者として、ともに歩み続けていきましょう。